

十一 文明史家としての田口鼎軒先生

——『鼎軒田口卯吉全集』第二卷『文明史及社會論』解説——

(一)

私は、此全集第二卷文明史及社會論の解題を起稿す可き命を受け、謹で之を引受けただけれども次の三つの理由によつて、自ら其任にあらざることを感じずるものである。(第一)私が、田口先生を最も善く知つてゐる方面は、言ふまでもなく、其經濟學に於ける業績に限られてゐるので、文明史及社會論の方面は、唯だ折にふれて、寓目したに過ぎない。今本卷に収録せられた諸文を見るに、初見のものも若干あり、従つて其文の公けにせられた當時の事を考ふるに由なきものも存するのである。(第二)文明史は、私の専攻學科には、間接の關係は無論あるが、直接私の従事する科目ではない。従つて、私は、其れについて、判断の能力を缺くものである。(第三)解説を起稿するには、一々、各文の公けにせられた前後の事情を考察して見るのでなければならぬ。然るに、私は、其便を有せぬ。何となれば、本卷の原稿の一覽を許される日数が、僅か二週間しかなく、辛うじて其本文を一讀するを得るに止り、其當時の他の文獻に就て、考證商量する時間が與へられてないから。

以上三つの理由によつて、私は、本當の意味に於ける解説を起稿することを斷念せねばならぬのであ

る。乍併、幸なことには、茲に、二つの先覺の述作があつて、遺憾なく先生の業績を著してゐるのである。

其一は、故田口先生を最も熟知し、先生に親炙すること久しかつた鹽島仁吉氏の鼎軒田口先生傳明治四十五年五月、經濟雜誌社刊行中の、第三十三章歴史の研究、第三十一章社會改良問題の二章是れである。其二は『我等』昭和二年六月號に掲げられた森戸辰男氏の『文明史家竝に社會改良論者としての田口鼎軒』と云ふ長篇の一論文是れである。本書の讀者にして、右二文を見らるゝならば、當時の事情と今日の立場と、其れ〴〵に於ける田口先生の地位を學ぶに於いて、大に啓發せられることであらう。

私は本文の讀者が必ず右二文を見るの勞を惜まれざるものと前提すればこそ、心を安んじて以下の略文を起稿するを得るのであつて、若し右二文なかりせば、私は到底解説者たる任を盡し得ないことを痛感するものである。従つて、以下記述する所は何等の意味に於いても決して解説の名に値するものでなく、唯私が今改めて此第二卷を一讀し、而して、其れに收められた先生の諸文の公けにせられた當時を、臚氣乍らに追懷し見て得たる印象の一端を、極めて粗略に殆んど何等の推敲を経ずして記述するに過ぎず、従つて、茲に収録せられた諸文の〴〵について記述することを敢てし得ないのである。此點は切に讀者の宥恕を乞はねばならぬ。

(三)

今、此第二卷に收むるところは、文明史の項に於いては、日本開化史、支那開化史、萬國商業史、古代の研究の四篇であつて、各其主著と直接、間接の關係ある小文數篇を附載してある。

社會論の項には、右の如く各編に其主要文と看るべきものなく、何れも夫れ〴〵の單行の論文數篇を、其内容によつて按排して、新日本と社會改良、社會政策是非、婦人問題、教育制度論、賭博無罪論、其他の五篇としてある。先生の面目は此等諸小篇に於て最もよく顯はれて居り、其れ〴〵其當時に於いて世論を喚起した重要なものである。乍去、學問上の立場から見れば、其等は研究の結果に成るものと云ふよりも、時事の問題について、政策上の見地、經世家、政治家の立場から試みられた評論であつて、其中には不朽の價値を有するものもある他方に、今日に於いては單に歴史的意義をしか有せないものも尠からずある。其等について一々解説を試むることは、決して無益の業ではあるまいけれども、其解説は恐らく先生の文の少くとも二分の一又は三分の一の長さを有つものでなければ、殆んど意味を成さないことになるであらう。其れ丈の紙數を費すことは無論此全集の性質の許さゞるところであり、又た私の今敢てし得る處ではない。而して、私が其様なことをせずとも、此等の諸篇は其自らを十二分に語りつゝあるもので、聰明なる讀者は一讀下容易に其れが今日に於いて、如何なる意義を有つものなるかを、考究め得られるであらう。よつて、私は此部分には全く言及せぬことゝした。

従つて私が今試みんとするところは、第一篇文明史のみについて、若干の考察を披瀝することに限られる。

第一編文明史についても、私は特に日本開化小史を中心として考ふることに力を集注し、支那開化小

史以下のことは間接に之れに言ひ及ぶに止める。商業史歌古代の研究(これは、私に取つて全く専門外のこと)に屬する(の二つについては他日機會あらば、多少補遺したいと思つてゐるが、今は私の力に及ばぬこと)故全く問題の外に置く。従つて私の解説は、解説の名あつて其實なきのみならず、文明史及社會論についても其全體に關する考察ではなく、單なる一の日本開化小史考であり、其れも開化小史の内容其ものについて、いなく、其全體について單に其一端を瞥見するに過ぎぬものである。

若しも私に時と力とがあるならば、私は決して、此くの如き斷片を以て甘んぜんとするものではない。少くとも其範圍に於てたりとも解説の名を恥しめないものを起稿したいは山々である。唯だ今與へられた事情の下に於いて、私は到底其を企て及ばないのである。此點は深く讀者諸彦の諒恕を乞はねばならぬ次第である。

私が特に日本開化小史を中心とした理由は、其れが先生の第二の處女作であると共に、先生一生の著述中、最も卓越したもの——私は左様信ずる——であるからである。勿論であるが、また私個人に取つて此書が最も懐出の深いものであるからである。私は十三四歳の小學生として、始めて此書を讀んで以來、深く先生を敬慕して今日に至つて、彌々益々先生の學問、先生の人格の仰ぐ可く尊ぶ可きを確信して居るものである。今先生の全集出づるに方つて、私が特に四十餘年前の昔に立返つて、再び日本開化小史を熟讀し、これについて考ふることは、私に取つて已む可からざるところである。讀者希くは、私が好む所に偏するを深く咎めざれ。

(III)

日本開化小史は、明治十年九月の日付を以ての自序を載せてあるから、其以前から執筆に従事せられたものと見える。鹽島氏の記す所によれば、其刊行は、明治十一年から翌十二年に亘つたと云ふことである(森戸氏によれば、明治十一年九月第一卷、同十五年六月最終第六卷刊行)。大正五年に至つて、其れが再版せられたことは、三上、黒板兩博士の序文に見えてゐるとほりである。

三上博士は再版に序して云つて居られる『博士の本領は經濟學に在りしは云ふを要せず、然れども其才氣の縱横なると、趣味の多方面なるとは、博士をして指を史學にも染めしめしが、其の研鑽は頗る精密其の識見は最も高邁にして、鬱然として斯界の大家となり、新井白石、頼山陽に續きての史家とも稱せられぬ。日本開化小史は原因結果の理法に基きて、我が邦の變遷を記せるものにして、叙述の體裁西洋の史學研究法に合ひ、斯界に一の生面を開かれたるものなり。經史相俟つと云へる歴史の舊式を脱して、所謂文明史流の歴史を試みられたるものなり。博士は、故重野安釋博士等と共に、新史界の陳勝たり、吳廣たるものと云ふべし。今日の進歩せる歴史界より批評するときは、日本開化小史には記事の正確ならざるものも有り、議論の不備なるものも無しとせず。或は、白石の折焚く柴の記を踏襲せりと早くより云はれしも、また其理全く無しとはせず。されども日本開化小史を批評する者は、先づ思はざるべからず、此の書は今より凡そ四十年(筆者註。昭和二年より云へばまさに五十年)前に著はされたるもの

なることを。此時に當り史學の研究は尙頗る淺く、國史として愛讀せられたる書は國史略皇朝史略さ
ては日本外史の類に止まり、大日本史を窺ふことの如きは、固より容易の業にあらざりしなり。史學會
は尙未だ生れず、我が大學に於てだに、國史科の設有らず。當年の大學總理たりし故加藤弘之博士が、和
漢學の耆宿漸く凋落して、後の繼がれざらんとするを憂ひ、臨時に古典講習科を開かれしも、日本開化小
史初めて出でしよりは後の事に屬す。大學豫備門長杉浦重剛君が、國民の教育には必ず其の國の歴史
を授けざるべからずと、備獨逸教師の切言するを容れ、折焚く柴の記を教科書とせられしも、また是れよ
り後の事なり。進歩せる今日の學界より觀れば、洵に隔世の感に堪へざるべし。此の時代に在りて國
史を著はし、しかも一生面を開かれたるを思へば、博士の本領また此方面にも在りと云ふを得べく、日本
開化小史の疵瑕の如きは、批評するの限りに非ずと容赦すべきことならん」と。

三上博士の此言は、日本開化小史の其出版當時に於ける重要な意義、また更らに、今日の我々が此書
に對すべき態度を、最も公平適切に言盡されたもので、一言も増減することを得ない至言である。私が、
千言萬語を今費やすとしても、右博士の道破せられた以外のことは、一も言ひ得るものではない。

田口先生の史學研究に最も深い縁故を有せらるゝ、黑板博士も、右書再版の序に於て下の如く言つて
居られる。『明治の初年、我が國の歴史界は殆ど見る影もなき有様なりき、偶々世に公にせらるゝものも、
古史の覆刻にあらざれば、僅に國學者漢學者の遺書に過ぎず、彼の太政官に設けられし脩史館が多くの
學者を有しながら、其編纂せられて出版を見るに至りしものは、ただ明治史要一部と稱するも可なり。』

この時に當つて我が學界を驚かしたるものは、實に博士の日本開化小史なりしなり。日本開化小史を
讀むものは、誰しも新井白石の讀史餘論、折焚く柴の記などを想ひ起すならむ。學者にして政治家たり
經濟家たり、はた文學の才ありて種々の方面に卓見の觀らるべきもの、江戸時代にありては白石實にそ
の第一人たり、而して其の天下後世を益する最も多きものは、我が史學に關する述作なりき。(中略)田
口博士何ぞ白石と相似たるところ多きや、(中略)たゞ白石の學問は漢學に根柢を有し、僅に蘭人によつ
て西洋の文明を覗きしのみなるに、田口博士の學問は、西洋の學術に基礎を置き、之れに和漢の學を加へ
しところ、博士の博士たる所以なり。(略)日本開化小史は明治時代に於る史學界の曉鐘とも開拓使と
も稱すべきものなり、其論ぜるところ或は多少の缺陷あらむ、また史實の研究未だ十分ならざりしもの
あらむ、然れども我が史學界に革新の空氣を齎し來り、我が學者をして覺醒せしめたる功績は、正に本書
を措いて他に求むること能はざるなり。余は本書を讀み、第一に博士が西洋の學問を研究する用意の、
全く時流を抜きしに感服せざるを得ず。想ふに當時我が國の學術はすべて歐米の模倣以上に出でず、
たゞ彼にあるものを我に移植せるに過ぎず、何等之を消化せずして直に我國に實行し應用せんとした
るもの多かりしに、この間にあつて先づ日本そのものを知らざるべからずとし、本書を著はせし博士は、
實に明治時代に於る先覺者として最も推重せざるべからず。(略)この日本開化小史は、蓋し博士が西
洋の一文明史を讀んで思ひつかれし述作ならむ。或はバツクルの文明史などによつて之が著述の動
機を得られしやも未だ知るべからず。我が國に於ける從來の歴史家とは全く態度を異にし、(略)我が國

の學者が一人も未だ考へ及ばざりし一新機軸を出し、之を我が學界に提供して史學者を警醒したる名著たらざるばならず。豈にたゞ史學界とのみはんや、我が國民をして始めて我が國の歴史がたゞ戰爭の歴史のみにあらず、たゞ政治の歴史のみにあらず、その以外に知らざるべからざるもの多きを知るに至らしめしは、本書に負ふところ甚だ大なりとす。言ひ換ふれば、明治時代に於ける文明史的の歴史が、日本開化小史に始まると稱するも過言にあらず、更に之を廣くすれば、西洋の學問を基礎とし、日本そのものを研究せし明治時代の著述はこの書を嚆矢となす亦た敢て溢美の辭にあらざるなり。(略)我が國に誇るべき歴史あり文明あり、必ずしも歐米諸國の下にあらざるを覺り、翻譯模倣以上に我が國の新文明を樹立せざるべからざるを反省せしめたる程、明治時代の國民を啓發したるは多く之を日本開化小史に歸せざるべからざる也。』(以上二文何れも、のせて、本全集第二卷の卷頭にあり。)

黑板博士のこの言は、まことに微に入り細を盡くして、印行當時に於ける日本開化小史の重要を描出して餘蘊を剩さるるものである。

既に斯く我邦現存の史學界の二長老が言ひ盡されて居る以上、私は同じ事を茲に繰返へす必要を見ない。私は唯だ二博士の言に關聯して、自己の所感を補遺的に申添へれば足れりと信ずるものである。

(四)

明治の初年に於いて、我邦の史學が衰微の極に陥つてゐたことは、如何にも、右二博士の云はれたとほ

りであるが、今日の私共に取つて、これは一寸考へると殆んど不可解の事である。何となれば、江戸時代に於いては、國學の振興に伴ひ、又た清朝考證學の影響を受けて、我邦の史學は當時としては可なり目ざましい發達を遂けてゐたのであつて、其れが明治維新と共に掻き消すが如く姿を潛めたように見えるから。

三上、黑板兩博士は、日本開化小史の出版された明治十一年頃の有様を如實に物語つて居られるので、如何にも、其の言はれるところに寸分も相違はないのであるけれども、若し江戸時代の事を全く知らぬ人——ソナナ人は今日は無論一人もある氣遣はないが——がありとしたならば、明治維新を距る十年にして、猶ほ斯くの如し然れば、舊幕府時代に於いては日本の史學なるものは、殆んど全く存在しなかつたと云つても大過ないものであつたらうと推測するかも知れないと思ふ。シカシ、其れは飛んでもない大間違であるのである。宣長の古事記傳一部を見てさへ、其の誤なることは直ちに分らう。況んや伴信友、狩谷棧齋等を始め數十を以て算する國學者、漢學者等の著述は、今日の所謂『進歩した史學』の立場から見ても、決して輕視することの出来ない純學問的研究の結果に成るものであつて、同じ時代の歐羅巴の歴史書と比較して見て、必ずしも遜色あるものではない。

新井白石の讀史餘論の事は、黑板博士の序文中にも見えてゐるとほりであるが、此れは史論としてのことで、却つて此方が、今日の進歩した史學の立場から云へば、見劣りがするものとも云へよう。其殆んど反對に、特殊的研究、考證的研究としての江戸時代の諸著作は、寧ろ不朽と云つても宜い位の價値を有

してゐるものであり、平田篤胤の諸著述すらも、兎角の評はあつても、或意味から云へば、白石の讀史餘論よりも、學術的價値の多いものとも考へられぬことはないと思ふ。

又た、轉じて、日本開化小史の刊行せられた當時について言つても、三上博士の序によると、折焚く柴の記を備獨逸教師の進言によつて、大學豫備門の教科書に採用したのは、右書の刊行以後の事であるソウであるが、私は現に日本開化小史の刊行以前、明治九年四月一日版權免許文部省檢定濟教科用書と明記した讀史餘論の複製本を所藏してゐる。但し其れは明治九年版權免許とあるのみで、出版日附を記してないから、果して、其年に發行せられたか否かは知ることは出来ない。

更らに又暫く、私に縁故ある經濟史の類について見ると、此頃本庄博士の盡力で複製せられた大日本貨幣史は、日本開化小史の刊行に先だつ一二年前明治九年から始めて十六年迄の間に上梓せられてゐる。次いで十六年には、横山由清氏の田制篇、十五年から十八年にかけては、大日本租稅志の刊行がある。然し此等は、田口博士の所謂編年體のもので、云はゞ舊式のものに屬する。然し今日の進歩した學問の立場から見ると、此等の書の價値は決して輕小なものではない。さればこそ本庄博士や幸田成友氏などの複製が大なる貢獻を爲す所以である。

私は、今思付いた一二の例をあけるに過ぎないのであるが、斯う云ふ風に詮索して來ると、明治十一年頃、日本の史學は見る影もないものであつたとは云ひ難い様に考へられる。然るにも拘らず、三上、黑板兩博士の云はれるところは、當時の有様を忠實に叙せられたのである。此一見矛盾せる状態は如何して出て來たのであらうか。

(五)

私は、此の一見不可解の疑問は、二つの考察によつて釋き得るかと思ふのである。

第一は、明治維新は、西洋の諺に『風呂の中の湯を捨てる』ときに、中に這入つてゐる赤坊をも一緒に流し去る』とあるように、徳川幕府を倒すと共に、其の産物を殆んで皆打捨て、仕舞つたのである。従つて、江戸時代に於いて發達した學問も亦一擲せられて、誰も之れを顧るものなきに至つた。後に至つて、大事の赤坊の居らぬに氣付いて探して見たら、其れは溝の中に捨てられてあつたと云ふ有様であつたのではないかと思ふ。田口先生は溝の中から赤坊を助け出した第一人者であつたのであらう。赤坊がなかつたのではない、一時紛失してゐたのである。

これは、明治初年の日本人の心理状態をよくあらはして居るものではあるまいか。炯眼なる田口先生あつたればこそ、大事な赤坊は見出され得たのである。先生の第一の功績は、其の發見であつたのであらう。

所謂舊弊打破で日本的のものは何んでも彼んでも皆いけなしいとして捨てた。捨てたもの、中にはつまらないもの、害のあるものも澤山あつたらうが、又た貴重なものも少くはなかつた。明治初年の日本文化は翻譯模倣の其れであつたとは、黑板博士の云はれるとほりであるが、同時に其れは自己忘却の

文化であつたとも云へる。恰も田舎娘が上野驛についたとき、道行く毛斷嬢を見て、己が姿の如何にも淺間しいのに穴へも這入りたく思ふ其心持が、明治初年の日本人の心事であつたらう。焉ぞ知らん、田舎娘滯京すること二三年、東京風に磨き立て、見ると、其容姿は不良老年共をさへあつと云はせる位のものになり、始めて、己れに天成の麗質あつたことを發見し、扱て曩に健羨した毛斷嬢はと見ると、其修飾は如何にも美事なものではあるが、仔細に點檢し來れば、鼻は團子であり、齒は百本杭の如く、脚部は家鴨の如くであるに、何んだ、コンナすべたであつたのかと氣が付くが如くであらう。

田口先生は、上野驛頭に到着した其瞬間からチャント此事を看破つてゐられたからこそ、黑板博士の言のよ様に、當時の人々をアツと云ふ程驚かせたのであらう。三上博士の序文に『此時に當り史學の研究は尙ほ頗る淺く』とあるのは、此意味に解す可きであつて、日本の史學其もの、研究が過去に於て、江戸時代に於て、頗る淺かつたと云ふ意味に取るべきではあるまいと思ふ。黑板博士が特に『明治の初年、我が國の歴史界は殆んど見る影もなき有様なりき』と云へるのも、また其のことを云ふのであらう。言葉を換へて云へば、我が邦の歴史界は江戸時代に於いては大いに見る可きものはあつたのであるけれども、明治維新の爲めに、一時全く自己忘却の淵に陥り、茲に見る影もない有様となつたのである。

私は此事を特に念頭に置かれんことを今の青年諸君に切望せざるを得ない。然らざれば田口先生の眞の事業を理解することが出來ないと思ふ。先生は無から有を生じたのではない、忘れられたものを喚び起し、捨てられたもの、中に、眞に價値あるものを見出して、之を救ひ出された。其處に先生の史學に於ける功績が存するのである。これは、經濟學に於ける先生の事業とは、大いに異つた意味を持つものである。

(一)

明治維新は誠に有り難いことであるに相違ない。其れと同時に、其の破壊による損失も可なり大であつたことを認めねばならぬ。史學の上に於いては、幸にも我が田口先生あつて其損失を軽減せられたけれども、他の方面に於いては、田口先生同様の人を缺くによつて、損失を被りつばなしになつたことは決して尠くはない。

私は屢々云ふ、明治の中葉前までには『鎖國の夢破らざる可からず』と一般に唱へられてゐた。これは、一の警語として甚だ大なる役目を演じた。乍併今日は、私は、或點に於いては『開國の夢破らざる可からず』と主張するの必要なるを認めると。此れは、世界大戰爭中、私が特に屢々云つた處特にウキルソン崇拜論者、日英同盟謠歌論者に對して、主張したところであるが、明治の初年についても、今日の我々は鎖國の夢は破らざる可からざると共に、開國の夢も亦た或度迄破つて、觀察せねばならぬと思ふものである。此點から考へて、私は上にあげた矛盾解釋の第二點をあげたいのである。

其は別事でもない。田口先生の日本開化小史が、三上博士の云はれるとほり『原因結果の理法に基きて、我が邦の變遷を記せるものにして、敘述の體裁西洋の史學研究法に合ひ、新界に一の生面を開き』『所

謂文明史流の歴史を試みられたるもの』であり、又た黑板博士の云はれる通り『我史學界を驚かし』『西洋の學術に基礎を置き』『我が史學界に革新の空氣を齎らし來り』『先づ日本そのものを知らざるべからずとし』『從來の歴史と全く態度を異にし』『史學者を警醒し』『ただ戦争の歴史のみにあらず、政治の歴史のみにあらず、この以外に知らざるべからざるもの多きを知るに至らしめ』『文明的歴史』『翻譯模倣以上に我が國の新文明を樹立せざるべからざるを反省せしめ』云々とある其事である。

此點は、江戸時代の史學研究が、如何に進歩發達したものであつても、逆も夢にも見ざるところであつたのは云ふまでもない。即ち田口先生は西洋の文明的敘述法を以て、日本の歴史をレコンストラクトせんと企てられたので、これこそ、時人を驚歎せしめたに相違ない。再び例を取つて云へば、山間の僻地に汽車電車が架設せられたようなものである。之に比べて見ると、駕籠道中の昔しは如何にも憐れなものに見えたに相違ない。今日駕籠にのつて道中するものありとせば、其乗つて居る人まで如何にも間拔に見える。反對に、自動車飛ばすものは、會社あらしのブローカーでも天晴の紳士に見えると云ふようなものである。バツタル、ギゾーの文明史流に、日本の史實を並べて見ると、全く別人の觀があること、田吾作を自動車に乗せて見たかの如くであつたらう。

私は、此の二つの理由が、一面には、明治初年の我史學界を見る影もないものたらしめ、他面には、此時に顯はれた田口先生の日本開化小史が、我史學のバイオニーター警鐘たりし所以を説明するものであらうかと思ふものである。

(七)

ソコデ、私は、右二つの點を念頭に置きつゝ、以下少しく所感を記して見ることにする。

黑板博士は云はれる『日本開化小史を讀むものは、誰しも新井白石の讀史餘論、折焚く柴の記などを想ひ起すならむ』三上博士も曰く『或は、白石の折焚く柴の記を踏襲せりと早くより云はれしもまた其の理全く無しとはせず』云々と。此事は、兩博士に限らない、殆んど識者間の定論の如くになつて居ることは、私共少年時代から承つてゐたところである。

私は、此解説を起稿するに方つて、念の爲め、其普讀んだ右兩書を、垢塵中から取出して再び通讀して見た。而して私は從來無批判的に信じてゐた右の通説の必しも當つてゐないことを感ぜざるを得なかつたものである。

第一、右兩書と日本開化小史とは如何にして右様に關係ありとせられるか、私は如何にしても之れを知る事が出来ない。折焚く柴の記は其記すところ徳川時代にのみ限られてゐる。日本開化小史は『神道の濫觴より佛法の弘まりしまで』を首章とし、以下『漢學の渡りしより京都の衰へしまで』『封建の權輿より鎌倉幕府創立に至る迄の地方の有様』等極く大飛びに飛んではゐるが、日本歴史の初から徳川幕府の倒れるまで十三章に分けて説いてゐるのである。

讀史餘論の方は、天下の大勢九變して武家の代となり武家の代又五變して當代におよぶ總論のこと

に筆を起し、幼主並攝政始付藤氏家學を建つることから、秀吉天下の事までを記述してゐる。思ふに通説は、秀吉天下までは讀史餘論徳川時代は、折焚く柴の記を底本としたように考ふるのであらう。然し日本開化小史が、此二書と相似たるところありと云ふは、其主眼とする史論の部についてよりもむしろ、箇々の記述の上にある。之を以て兩書を踏襲したものであるとは如何して云ひ得るか私には理解し得られないところである。

無論田口先生は、日本開化小史の執筆に方つて、折焚く柴の記や讀史餘論を坐右に置いて、始終参考せられたのであらう。而して、其ことを明かに自認し、人にも語られたのであらう。先生の告白を聞いた人から傳はり傳はつて、折焚く柴の記讀史餘論種本説が一般に信ぜられるようになったのかも知れぬと思ふが——此邊の事情は、鹽島君若くは同君よりも、モット先輩の生存者があらうから、承つて見たいと思つてゐるが、未だ其暇を見出さない——これは、若し先生自ら左様公言せられたものとしても、先生自ら一の錯覺に陥つてゐたのではあるまいかと思ふ。

私は今、一々三書を對照して、其異同を考證する違を持たないから、或は精密に對照して見たら、私の今懐く感想は根本から翻へされることになるかも知れぬと思ふが、普通一般の讀み方を以て、三書を別々に讀んだところでは、右種本説は一の錯覺に陥つてゐるものではないかと思ふのである。山陽の日本外史の史論が讀史餘論に據るところ多きものであることは、田口先生自ら之を極論せられて居るが、少くとも其意味にての關係は、日本開化小史と折焚く柴の記讀史餘論との間には、斷じて見出し得ざるも

のと云つても、私は誤を傳へるものではないと思ふ。否、折焚く柴の記讀史餘論の史論と日本開化小史の史論とは、其根本の着想に於いて全く無關係のものと云はねばならぬと、私は思ふものである。

白石は多少原因結果的論斷を下してゐるには相違ない。然し白石には歴史哲學めいた根本史觀は見出せない。彼は飽くまで歴史の領域を嚴守してゐるように見える。歴史以外の一種のアプリアリを前に置いて、歴史を觀察しようとする態度は、殆んど全く之を見出す事が出来ない。三上、黒板兩博士の言葉を借りて云へば、文明史流の考は白石には全く之を見ることが出来ないのである。——私は史學に於ける白石の大なる貢獻は、折焚く柴の記や讀史餘論よりも其古史通に於いて之を見る可きものはあるまいかと思ふものであるが、其は今關係のないことであるから、論外として置く。

田口先生は、此點に於いて全く反對であつて、先生の史論は絶へず一の在外的アプリアリを置いてかかつてゐる。

今日の言葉を以つて云へば、白石のは *erkennende Geschichte* であり、田口先生のは *denkende Geschichte* である。更にヘーゲルの言葉を以て云へば、白石のは *reflektierende Geschichte* であり、殊に其第二種たる *pragmatische Geschichte* であらう。田口先生のは十分の意味に於いてとは行かないけれども、ヘーゲルの所謂 *philosophische Geschichte* に算入すべきものではないかと思ふ。(ヘーゲル『歴史哲學』一九二〇年刊ラッソンの版にて一七三頁至一七七頁)

(八)

アプリオリを置いてかゝる史論は其アプリオリが捨てられると其全部が半若くは其以上意義を失ふ。pragmatische Geschichteも其標準とする『現在』其ものが變ずれば意義を損ずることは無論だけれども、全く之を失つて仕舞ふとは限らない。白石は『御當代』をブラグマとして天下の九變武家の五變を叙述した。此の『御當代』が『昭和の御代』によつて置き換へられ、ば無論其れ丈け違つて來るには相違ない。然し其の『御當代』其ものを知る爲めには、『御當代』が『ブラグマ』である史論は、決して全く無用に歸しはしない。又『御當代』にまで變遷して來た跡は、兎に角就いて窺ふことが出来る。

其反對に、一の哲學的アプリオリを置いて觀察した史論は、其のアプリオリは元々の架構物であるから、全く消滅することもあり得る。『御當代』の様な現實の存在を有つものではない。

少し話が脱線するかも知れないが、マルクスの唯物史觀に基く史論が其一例とも見られ得る。階級の對抗、鬭争を置いてかゝり、『御當代』をブルジョアとプロレタリアとの對抗の最高頂と見てかゝつて『人間の解剖は即ち猿の解剖である』我々が過去を尋ねるには現代の階級鬭争觀を以てせねばならぬとして立てた史論は、其の階級觀、階級鬭争觀が一擲せられると共に、其全部の意義を失ふことになるかも知れないのである。

更らに、此例は推して田口先生の西洋方面に於ける藍本であつたと言はれてゐるバックルの英國文
明史、ギゾーの歐洲文明史にも及ぼすことが出来ると思ふ。バックル、ギゾーの史論的オペラチオンの前提であつたもの、其れが崩れて跡を止めなくなると共に、此兩人者の史論は單に一の文獻資料としてのみ價値を止めるに過ぎないことになる。

右の次第で、私は黒板博士が『日本開化小史を讀む者は誰でも白石の折焚く柴の記や讀史餘論を想ひ起すならむ』と云はれた言に、若干の但し書を附加する必要があると思ふのである。私は折焚く柴の記や讀史餘論を想起すと同時に、若くは、むしろ其れよりも前に、バックルやギゾーや而して更らにマルクスやエンゲルスやを想ひ起すと云ひたいのである。

然し、以上は白石の折焚く柴の記、讀史餘論と日本開化小史との差違を明瞭に言ひ表はしたい爲めに云つたのであつて、日本開化小史其ものについては右言に可なり多くの割引を附けなければならぬのである。其は何故か。

田口先生は其の日本開化小史に於いては、慥かに一つのアプリオリを置いてかゝられた。此意味に於て、右書は一の *philosophische Geschichte* であるに相違ない。乍併、先生が置かれたアプリオリ其ものは實はヘーゲルをして云はしめれば矢張一の『ブラグマ』であつたと思ふ。其『ブラグマ』とは、廣く云へば文明開化と云ふことであるが、其を具體的の語に翻譯して見ると、明治初年の識者に對しての指導精神であつたところの『平民主義』『自由民権主義』これであつた。即ち此意味に於いては、白石の其れと同種類の一の『御當代』てふ『ブラグマ』であつたのである。然し、白石の『御當代』とは即ち *Das*

Befehlende 以上に出づるものでなかつたが、田口先生に於いては、其れは同時にまた Das zu Erstrebande であつた。言葉の濫用を許されるならば、其時代の理想たる指導精神、其れが、先生に取つての『ブラダマ』であつたのである。私は斯う云つて大して間違つては居らぬように思ふのである。

従つて、此意味に於いて先生の日本開化小史は『日本開化之性質』『日本之意匠及情交、一名社會改良論』『日本古來の憲法如何』の三小論文と共に、白石の讀史餘論とは違つた意味に於いて、いはあるけれども、『御當代』を即ち明治十七八年頃に至るまでの日本を研究するに於て、讀史餘論が其時代を研究するに缺く可からざるものであると同様な、或はそれよりもモット適切な意味に於いて缺く可からざるものである。

但し讀史餘論が、天下九變し、武家また五變して、御當代に至つた、其の變遷を窺知せしめるに寄與すること大なりと云ふ意味に於いて、明治の初三分の一に至るまでの、上古からの變遷を窺知せしむるに寄與すること大なりと云ふことは、必ずしも、同時に、其れに伴つては居らぬと思ふ。尤も、此點は、見る人によつて、全く異つた見解を生じ得る餘地のあることであらうから、私は強ひて、之を主張する意志は毛頭も持つて居らぬものであることを、御断りして置かねばならぬ。

日本開化之性質は、明治十三年淺草井生村樓で先生が演説せられたものであるソウであるが、其れが印刷に附せられたのは、明治十八年のことであつて、私は十三四歳の少年として、何かの機會に其本を讀んだことがあつて、今によく記憶してゐるが、其要旨は日本の開化は貴族的であり、西洋の開化は平民的

である。日本の平民社會、熊や八やの社會は、即ち西洋の社會である。居酒屋で酒樽に腰かけて呑むのは西洋料理でする通り、熊や八やの絆纏は即ち洋服の背廣であると云はれたもの、様に覺えてゐて、十三四歳の少年たる私は、其名論に悉く心服してゐたものである——附て云ふ、此書の句調はギゾーの文、明史ソツクリで、屢々諸君よを繰返すところまで似て居る。而して其趣意は、ギゾーの説くところ殆んど其儘である——日本の意匠及情交、一名社會改良論の要旨も粗々同様である。日本開化小史に於けるよりも、此二篇に於いて當時の田口先生を捉へてゐるところの『イデオロギー』は判然と顯はれてゐるように思ふ。而して日本開化小史の『ブラダマ』も亦其れではないかと思ふ。此の『イデオロギー』は白石の讀史餘論には全く見出せないところである。

猶詳しいことを書きたいのであるが、私に許された時日が如何にも短い爲め、残念乍ら其れは斷念せねばならぬ。兎に角、私は日本開化小史を以つて讀史餘論に似通ふところ多しとする從來の通説には著しく懷疑的態度を執ることを餘儀なくせられるものであることを、ハツキリと記して置けば、即ち足るのである。

(九)

ソコデ、第二の點に移る。

日本開化小史竝に本第二卷の第一編に収録せられた諸小篇に顯はれたところでは、田口先生の文明

史に於ける一のアプリオリとも云ふ可きイデオロギーは『平民主義』『文明開化主義』『自由民権主義』などの語を以つて言表はず可きものであつたらうと思はれる。

森戸辰男君は前記の『我等』誌上の論文に於いて、田口先生を以つて、向上的ブルジョアジのイデオロギーを探られたものなる由を事詳かに論じて居られる。如何にも深刻な而して徹底的な見解と思ふ。しかし、マルキシストたる森戸君がマルキシズムの『フォルムラ』に詰め込められた此の議論は、マルキシストたらざるものには、必ずしも同様の妥當性を有つとは云へまい。マルキシストたらざる私は、森戸君の解釋は甚だ面白いものであることは、十二分に之を認めつゝ、必ずしも同君の見解に直ちに雷同すること能はざるものである。

今其理由を具さに述べることは餘りに脱線的になるから之を差控へるが、抑もブルジョアジのイデオロギーとは何を指して云ふか。私は其れを知りたいのである。私の淺薄な見聞の届く限り適當の意味にて云ふブルジョアジのイデオロギーとは、ブルジョアとの對抗に於て始めて發生するものであらうと思ふ。プロレタリアなくして、ブルジョアを考ふることは出來ない。然るに、明治十年頃の我日本に於いて、意識せられたプロレタリアなるものが果して存してゐたらうか否か。否、意識せられざるプロレタリアすら果して存してゐたらうか否か。私は第一に此事を疑問とせざるを得ぬ。プロレタリアの明なる存在、意識せられたるプロレタリアのイデオロギーの存在が、證明せられずして、其れと對抗してのみ初めて考へ得らるゝ、ブルジョアのイデオロギーなるものを考へることが

出來ようか否か。私は甚だ惑ひなきを得ないのである。——此點に於いて、田口先生が明治二十四年に至つてさへ、猶次ぎの様な考を固守して居られたことを知るは興味あることと思ふ。即ち先生曰く『余輩の見る所を以てするに、苟も斜狹の酒を飲み、端唄の一曲さきりも唄ひ得る半可通は、決して壓制者たるを得ざるなり。去れば日本今日の工場は、職工の爲めには極樂淨土にして傭者及び株主の地獄なり』と。(本卷五三五頁)

假りに一步を讓つて、ブルジョアとプロレタリアとの特定階級の對抗と見ず、兎に角壓迫者の階級と、被壓迫者の階級と云ふことに言ひ廣めて見ると、田口先生のイデオロギーは壓迫者の其れでなく、むしろ被壓迫者の其れであつたことは、言ふまでもないことである。森戸君が『向上的』と冠詞を附せられた意味は未だ壓迫者の地位に進み來つて居ないブルジョア階級と云ふ意味ではあるまいか。然るに、明治十年前後に於ける壓迫者と被壓迫者との其れは、私の淺薄な見解では、未だ階級化して居らぬものであつて、却て、其れは未だ等族的 *ständisch* なものであつたと云ふ方が適切ではないかと思はれるのである。

他の言葉を以て云へば、田口先生の探られたイデオロギーは、明かに、第一、第二等族に對抗するものとしての第三等族の其れである。第四等族に對抗するものとしての其れではない。更らにまた、第四等族の其れでないと共に、第一、第二等族の其れでないことは疑を容れない。即ち、先生の平民的と云はれる其の平民とは、第三等族を主として——但し、多少の混同はあるやうであるが——云はれるので、先生

の熊や八やは第四等族の代表者として、*い*なく、第三等族の成員として選出されたものではないかと思ふ。

私の狭い見聞では、少くとも江戸時代の江戸には第四等族は全く之を見出すことは出来ない。特に其イデオロギーに於いて、第四等族なるものは決して之を見出すことが出来ないと思ふ。明治十八年頃までの東京に於いても——地方は暫く別として——私は第四等族のイデオロギーは全く之を見ること能はずと思ふものである。此意味に於いて、宵越の錢を使ふを屑しとせざる江戸ッ兒なるものは、第三等族のものであつて、決して第四等族のものでないのではないかと思ふ。其れと其時に、先生否、先生によつて、代表せられた三河武士、乃至は江戸ッ兒は、決してブルヂオアでなかつた。少くとも其イデオロギーに於いて、ブルヂオアたり得ざりしことも、亦恠む可きところないかと思ふ。

私の考ふる所では、日本に於けるブルヂオアは、大阪人や江州商人やによつて造り出されたもので、東京は唯だそれを或は模倣し、或は之れに追従したに過ぎないやうである。少くとも、其のイデオロギーの上に於いて。

(十)

其れと共に、私は明治維新の指導精神當時の所謂文明開化のイデオロギーを以つてブルヂオアジの其れであつたとすることに、著しい疑惑を抱かざるを得ないものである。ブルヂオアのイデオロギ

ーとか、若くはモ少し餘裕を許して、漠然と『資本主義的精神』とか云つて見るとする。其れは畢竟何物の謂であるか、營利を求むる精神、又は近頃の新しい解釋に従つて、*das Streben zu gewinnen* (Gewinnssucht) でなくなりとして見る。而して、明治初年の第三階級の指導精神が假りに其れであつたとして見る。然るとき、我々は、田口先生の主張せられた文明開化の主義は、此の第三階級の求むるところとは寧ろ全く相反してゐたと云ふ方が適してゐはせぬかと思ふものである。何となれば、先生の所謂文明開化は、平民主義の名の下に、飽迄政治上の自由放任を主張するものである。自由放任は少くとも、英吉利に於ては十九世紀の半過ぎに至るまでのブルヂオアジが只管に政治上に於て求めたところに相違ない。何となれば、政治上の自由放任は當時の英吉利のブルヂオア——木綿工業に其の中心を有するところの——に取つては、其營利の要求を最もよく充たす所以であつたから。

ところが、明治の初年、否、昭和の今日と雖も、我日本のブルヂオアの求むるところは決して政治上の自由放任ではない。其れは決して彼等の營利の要求を充たすものではない。明治の初年から今日に至るまで、我ブルヂオアジを偉大なるものたらしめたのは、政府の保護干渉であつた。政府の保護干渉なくしては、我邦にブルヂオアジは成育し得なかつたのである。今日でこそ、武藤山治氏の様な政治上の自由放任を飽迄も主張する大企業家であり、而して眞に自力で其ブルヂオアジを築き上げた人があるが、其れは今日と雖も、むしろ、例外に屬すると云つた方が當を得てゐる。鈴木商店や川崎造船所將た亦た、臺銀、十五銀行などの例は、今現に我々の目の前に横はつてゐるではないか。

明治の初年から今日に至るまで、大を爲した諸々の企業、三菱、三井、郵船などは言ふまでもなく、其他殆んど皆果して、政府の特別の庇護なくして其大を爲したものであらうか。日清戦争以後は、稍々自力で立つ外國貿易も營まれて來たやうであるが、其れまでは、貿易でも工業でも銀行でもむしろ少數の例外を除くの外は、孰れか政府の保護によつて其大を成したのでないものがあらうか。田口先生の主張にして若し行はれるとしたなら、此等のブルジョアは少くとも今日の如き有様にまで發達し來ることは出來なかつたであらうと思はれる。

福澤先生も田口先生同様自由放任を主張されて始終一貫せられたけれども、慶應出身者の實業界に成功した人々の中、若し先生の説が實際に行はれたとしたら、却つて之を欣ぶ能はざりし人の數は甚だ多かつたであらうと思はれる。此等の人々に取つては、幸にして福澤、田口兩先生の説が單に議論たるに止まつて、實際の有様は其正反對であつたればこそ彼等は、今日の大を爲し遂げ得たのではあるまいか。

斯く考へて來ると、森戸君が田口先生のは向上的ブルジョアジイのイデオロギーであつたと云はれるのはむしろ、『逆立ち』の見方ではないかと思はれるのである。

言葉を換へて云つて見ると、田口先生のは當時の西洋のブルジョアのイデオロギーであつたとは無論云ひ得るであらうが、現實の日本の其れであつたとは甚だ言ひ難いやうに思はれるのである。

無論私は今森戸君と討論を開始する意念を有つものでないから、此語を詳しく論ずるわけには行か

ないが、私が斯く同君の説に疑を挾む所以は、田口先生の所謂文明史なるもの、真相について、文明史と云ふ名前に誤られる虞のあることを指摘したいからである。

(十一)

三上博士も黑板博士も、日本開化小史を以て西洋流の文明史の着眼を以て、日本の歴史を取扱つたものとせられてゐる。私は、此點に關して誤解の起らんことを虞れるのである。何となれば、田口先生の採用せられたのは、適當の意味に於ける文明史の其れでは決してなかつたと信ずるからである。

此事は支那開化小史について、島田、小池、末廣の三氏既に之を論じてゐられる。島田氏曰く、『本書専ら治亂の大綱を論じ、瑣屑の事を記さず、尋常支那史と異るところ實に此に在り。然し記すところ特に政治上に在り、而て一般社會の事に涉らず。稱して開化小史と曰ふ、恐らくは名其實に過ぎたり、改めて、政綱小史と爲す如何、敢てこれを田口君に質す』と。(本卷二六四頁)

田口先生は此等諸氏に對して書末に辯じて云ふ。

『島田、小池兩兄は此書を以て開化史の體を得ずとなし、末廣兄亦之に同意せるが如し、而して余も亦た實に我が意に適せりと謂ふにあらず。一は、支那史に據りて史を修するもの勢此の如き體裁に至る事、二は余が今日推究せんと欲する所は、専ら是等の事實に在ること、之は余が此書中曾て文物の變遷を併記せざりしことに因り、實に此書をして政事史の面目を帶ばしめたるなり。故に此點に就ては余敢

て辯解の辭を陳ぜず、唯恐らくは世間開化史の名を聞き文物の變遷を記するものなりと誤認するものあらん、故に茲に之を辯ぜざるを得ざるなり。蓋し開化史は社會の史なり、抑々人間社會には大理あり、封建の破ぶるゆゑん、郡縣の興るゆゑん、專制政府の腐敗するゆゑん、叛民の蜂起するゆゑん、文學の隆替するゆゑん、衣服飲食住宅の盛衰するゆゑん、皆な原因なくして發するものにあらず、而して是又他の原因とならざるなし、之を稱して大勢と云ふ。此大勢の社會に横流すること恰も支流の水合して大江を成すが如し、西洋に於いては此大勢多く文物進歩の元素を有し、支那に於いては多く政治權力の元素を有す、是れ二開化史をして異相を呈せしむるものならざるべからず。故に開化史を以て特に文物の變遷を記するものとするは誤なり』云々。(本卷二八八至二八九頁)——但し島田氏等の云ふ文明開化史とは Kulturgeschichte のことではなく Institutional History 又は Sitengeschichte のことであつたやうに思はれる。——

鹽島氏は記して云ふ、『小池靖一君は、先生が支那開化小史を著はすに至りしことに關して曰く、『田口君嘗て末廣重恭氏を其家に訪ふ、机上に清の趙甌北所著二十二史劄記あり、君展讀稍久うして曰く、是れ支那開化史の材料と爲すにたる、余必ず之を編述せむと。而して終に支那開化小史の著あり、是れ後に末廣氏が余に語りし所にして、氏も亦君の述作に長ずるを驚異せしなり』云々。鼎軒先生亦此のことを支那開化小史の跋文に於て告白せられたり。曰く、『余此書を著す際、多く支那史を讀めり、略獨り清の趙甌北ありて、此の砂石中より珠玉を拾ひ、以て吾人に與へたり、余の勞は唯々此の珠玉を概括して其大勢を察し、其大勢を絲として珠玉を綴りたるに止まるのみ故に支那開化小史の事實は、主として趙

甌北の二十二史劄記に取れるものなり』云々。(鼎軒田口先生傳四一二頁)

日本開化小史も支那開化小史も、其取るところの底本が多く政治史であつて開化史でなかつた爲め、自然に先生の此兩史が政治史に傾いたことは先生自ら右云はれるとほりであらう。此れが今日なら剽竊とか燒直しとかで、江戸の仇を長崎で打たうとする人々に好材料を供することになるであらうが、私は其様な詮索を以て全く無用と認める。何となれば、先生著述の時に方つて、遙かにより、豊富な材料が先生の前にあり、先生は自由自在に開化史的資料を拾ひ上げることが容易であつたとしても、私は先生の兩開化史は依然として、政治史の範圍を、多く出づるものではなかつたらうと思ふから。

先生は、材料の關係から其欲する所以上に開化史を政治史化せしめたのであらうことは、殆んど疑を容るゝ餘地はないこと、思ふが然し其れよりも、先生の根本的史觀即ち先生の歴史觀の根柢に横つてゐるアプリアオリが、當然先生をして開化史を以て政治史とせしめたものであらうと思ふのである。茲にも、私は森戸君の見解に多少の異存を見出さざるを得ないのである。

三上博士は『日本開化小史は、原因結果の理法に基きて、我邦の變遷を記せるものにして、叙述の體裁西洋の史學研究法に合ひ、斯界に一の生面を開かれたるものなり(略)所謂文明史流の歴史を試みられたるものなり』云々と云はれ、黑板博士も亦た『この日本開化小史は、西洋の一文明史を讀んで思ひつかれし述作ならむ、或はバックルの文明史などによつて之が著述の動機を得られしやも知るべからず』『文明史的の歴史が日本開化小史に始まると稱するも過言にあらず』云々と云つて居られる。私も如何に

も左様であつたらう而して此點に於いてこそ先生の二開化史の眞意義が存するのではあるまいかと
思ふものであるが、其の『原因結果の理法』と云ひ其の『西洋流の文明史』と云ふものを私を以つて見れば、
實は文明史では全然なかつたのではあるまいかと思はれるのである。

三上博士の所謂原因結果の理法を求むるの必要は、田口先生は隨處に之を主張して居られる。而も、
其れは、私を以て見れば、極めて限られた原因結果の理法の探求であつて、而して其れは決して文明史流
の原因結果の探求ではなかつたように考へられるのである。

(十二)

先生は二開化史に於いてのみならず、其後あらゆる機會に於いて、社會事物變遷消長の原因を政治に
歸して居られることは、此の全集を通讀せられた人々は、容易に氣付かれることであらう。而して其れ
は實に先生に於いては根本史觀であり、否根本人生觀に基くものであつたやうに思ふ。

先生の衣鉢を忠實に襲ひて編輯せられて居つた東京經濟雜誌の議論は、如何なる問題に對しても結
局其最終原因を政治に歸して居たことは、同誌の殆んど最終號までの愛讀者であつた私の今に忘れざ
る所である。教育問題であれ、社會問題であれ、否文藝學術の問題に至るまでも、結局其最終の解釋者と
しては、政治が指摘されて居る。今も猶生存して居られるから、最も有力の證據となると思ふが、鹽島仁
吉君の如き、其立論は毎時左様であり、否私的の會話に於いても同氏の必ず繰返されることは、其れであ

つた。疑ふ人は、一度鹽島君と會談して見られ、ば直ぐ首肯せられることであらう。又た東京經濟雜
誌の何千號に涉つて其證文を列擧せよとなれば、其は無數であると思ふ。鹽島君のみならず、木村半兵
衛氏其他先生の教を奉じて居た人々は、何れも皆左様であるやうに思ふ。

言葉をかへて言へば、田口先生は文明史を作るに最も不適當な學者であり、反對に、政治史家としては、
實に徹底的に殆んど信仰的に鞏固な學的信念を有して居られた學者と云つても大過ないかと私は思
ふのである。日本開化之性質、日本之意匠及情交は、其題目から云へば文明史的論篇であるやうに考へら
れようが實は同じく政治論である。日本古代の憲法如何に至つては無論言を俟たざるところである。
故に私が本書の編輯者であつたなら、私は文明史と云ふ題目に換ふるに、政治史若くは、より適切には、啓
蒙的政治史の其れを以てしたであらうと思ふ位である。

然し、先生は此等を以て、政治史とは見て居られない。十二分の信念を以て、之を開化史、文明史として
居られ、而して、其然る理由を辯明せられること、前掲の支那開化小史の跋文に於けるが如くである。即
ち、先生は文明史とは實に此くの如きものならざる可からずと深く自ら信じて居られたものであつた。
必ずしも、白石や趙甌北によつて誤られた次第では毛頭ないのであらうと思ふ。

私は此點に先生のイデオロギーを見出し得、否見出さなければならぬものと考へて居るのである。
而して、私は此イデオロギーの成立を二様の立場から解釋し得るかと思ふのである。

第一はむしろ、附隨的であり外形的であり、第二は、根本的、内在的の事情である。

(十三)

先づ其の第一について考へて見る。

黑板博士は(一)『先生は西洋の一文明史を讀んで思ひつかれしならむ』(二)或は、バツクルの文明史などによつて之が著述の動機を得られしやもまた知るべからず』と云つて居られるが、私は(一)には賛同し得るが(二)には賛同し得ないのである。

バツクルの英國文明史は、必ずしも政治本位の文明史でなく、彼は勉めて文明史其ものを書かうと努力したものであつた。三冊の浩瀚な卷子を以てして、猶ほ未だ本體に入つて居らないのである。故に近年(刊年記載なし)此書をルートレッツ社で複製し之れに細評を加へて出版したロバートソン氏は、其書の書題を改めて『英國文明史緒論』とし、わざ／＼『緒論』(イントロダクシヨンの二字を附加した位である。誠に然り、此書は緒論も緒論、文明史のホンノ入口で止つて居るのである。バツクルは原因結果の探求をせぬものは文明史でないとし、而して其は一の立派な科學たる可きものだ)と極力主張して居る。彼は其意味での一の立派な科學としての文明史を大成せんとして、此の未曾有の大著述を企てたが、其れは實に數千頁を費してまだホンの緒論の一節を書き上げた丈で死んで仕舞つたので、其抱負の遠大なることは實に驚く可きものである。彼の求むる因果の理法は著しく所謂唯物史觀に近いものであつて、經濟上の原因を力説して居る。

無論彼は氣候や風土やの影響を力説してゐる。然し彼は、氣候や風土を最終原因なりと彼が説くもとの誤解に對して極力辯明して、氣候や風土は經濟事情に影響する。其の經濟事情——但しソレは唯物史觀の其れに於けるやうに、明瞭にフォーミュレートせられてゐない。極めて茫漠たるものである——が、文明史上の最大動因であると主張するものであることを高唱してゐる。彼は原因結果の理法の人類の歴史に儼として存するものなることを、開卷劈頭に説き起し、長々とカントの自由意思論を引照し、又たコントの説を引いて、單なる事實の蒐集、田口先生の所謂編年史體は、決して歴史でないことを極めて多辯的に辯じて居ること、此頃の唯物史觀辯證法論を聞くが如きものがある。一八五七年から六一年にかけて刊行された此書の著者は、一八四七年に公けにされたマルクス、エンゲルスの共產黨宣言や、一八五九年に公けにせられた經濟學批評を知らない如く——事實知らなかつたのであらう——であるが、今日の我々から見れば、此等は同じ様な雰圍氣の中から産れ出でたものと認めざるを得ないのである。

但し、バツクルとマルクスとは到底比較にならない程、其の Insight に於て懸隔してゐる。例へばフランス革命の起つた原因を叙したバツクルの一章などは、支離滅裂なもので、到底マルクスの徹底した史觀に伍し得るものではない。バツクルは、マルクスは扱て置き、同じ文明史家のギゾーに比べても、其學的 Insight に於いて、遙かに劣るものである。否、マコーレーにさへも及ばないのである。彼は、自家の博識を到る處で示さうとあせつて居ることが、あり／＼と見えて、むしろ讀者に厭倦の念を催さしめる。

私は此一文を草す可く、三十五六年前に一讀した切り其後讀んだことのない此書を再讀して實にあきくしたことは、恰も此頃流行の脚註澤山のデモ研究論文に接すると同様であつた。

然し兎に角、バツクルは決して最終の原因を政治に求むること田口先生の如くなるものでないことだけは確かである。

私は疑ふ、田口先生はバツクルの此書を初め數章以上に進んで通讀せられたものであるか否かを。事によると、先生は初めの數章殊に第五章までは丹念に通讀せられたであらうとも、第六章以下は果して如何であつたらうかと。殊に第十六章以下スコットランド論を讀まれたなら、就中バツクルのアドムスミス論を熟讀せられたら、先生の史觀は可なり異なつたものとなつたのではあるまいか、而して然る場合には、先生が經濟學者であると共に史學者であり乍ら、商業史歌、日本古代通貨論評以外、寸毫も經濟史に指を染められなつたと云ふ一の謎は起らないで済んだのではあるまいかと思ふのである。

(十四)

此謎は實に謎であつて、私は今まで如何しても之を解くことが出来なかつた。

先生の生前、私は先生と會談したことが唯一二度ある限りであるが、其一に於いて私は卒直に先生に質問して云つた。先生は歴史に甚大な興味を持たれ特に國史に就いては史海を發行して所謂輪切體の評論を續々出されてゐられますが、何故先生は我邦の經濟史に指を染められないのですか、私如き歴

史に何の素養もないものは、到底如何することも出来ませんが、其でも、西洋留學中發奮するところがあつて日本經濟史論を書いて見ました。先生は何故日本經濟史なり支那經濟史なりに進出せられないのですかと。其時先生は、其は考へないではないが、今日まで其暇を有たなかつた、君の日本經濟史論なるものは是非見たいものだが、英語か、日本語の翻譯はないか云々と答へられた。

私の『日本經濟史論』の翻譯が坂西教授によつて作られたるは、先生の逝去後二三年の事であつた爲め、終に呈本の光榮を有せなかつた。私は、今日に至るまで、先生が日本經濟史に指を染められなかつたことを實に非常に遺憾なことに思ひつゝ、其は單に暇がないからばかりではあるまいと思ひ、此事を一の謎として居たのである。

然し今日になつて考へて見ると、右の謎は釋け得るように思ふ。先生は無論文明史家ではなかつた。其れとは程度は異なるが、實は先生は經濟學者でもなかつた。先生は政治學者にして政治家たり政治史家であつたのである。而して其れは、先生のイデオロギー其もの、大きく云へば、先生の人生觀其ものから當然に然るのであつた。經濟史に興味を起されなかつたのは誠に必然的の一事である。——去大正四年十一月、故先生贈位記念會に於て、私は『經濟學者中の偉大なる非經濟學者』と題して、同様の併し今日ほどは徹底せざる趣意を申述べたことがある、其文今收めて拙著『經濟學全集』第四集自一四三五至一四五一頁にある——

社會問題に對する先生の態度も亦經濟學者の其れ又は文明史家の其れではなかつた。全く政治學

者、政治家、政治史家の其れであつた。

私は右の理由を先づ外形的に求めれば、其は黑板博士の云はれるように、西洋の一文明史の感化によることもあらうと思ふが、其の一文明史は決してバックルの其れではなかつたと思ふのである。然らば、何れの西洋文明史であるかと云へば、其は——文明史、經濟史、更らに又た經濟學と云ふ立場から云へば甚だ不幸な事であつたと思ふが——ギゾーの歐洲文明史其ものであつたのではあるまいかと考へるのである。

黑板博士は云はれてゐる、『田口博士何ぞ白石と相似たるところ多きや、政治家にして經濟家たること相似たり、文學者にして歴史家たること相似たり、平易流暢の筆を以てよく言はんとするところを曲盡する手腕また最も相似たり』と。私は博士の此言は實に適評と思ふが、其れと同時にまた私は敢へて云はんとす『田口博士何ぞギゾーと相似たるところ多きや』と。

尤も、先生はギゾーについては、白石についてほど、私淑せられたものでは、無論あるまいと思ふ。先生が其着想の一部をギゾーに取られたるは、或は偶然の事情に基くのかも知れない。バックルの書は無慮數千頁、短時間を以て讀過し得られるものではない。之れに反して、ギゾーの歐洲文明史は三百頁餘りの一冊子、而もバックルのような煩鎖學術的のものでなく、天空快馬を驅らす底の明快流暢な講義體のものである。恐らく先生は此書の全篇を通讀せられたのであらう。殊に初め數章は之を愛讀せられたのではあるまいか。

ギゾーは頗る長命で、明治七年——其は私の生れた年である——に八十餘歳で平和な終りを遂げたのであるが、其歐洲文明史は、第一の妻を失つた頃の一八二八年に公けにしたもので、而も彼の一生中最も輝ける時に於て、巴里大學で群がる聽衆を前に、光彩陸離たる十四回講義をした其の筆記——若くは草稿——であるのである。

私は十七八歳のとき英譯で之を一讀した切り、此度初めて其原本を一讀したのであるが、其の流暢な其の燦爛たる文章に魅せられて思はず夜を徹して全冊を通讀し終るまで巻を釋くことが出来なかつた。私の生れた頃か、其二三年後かの間に於いて此書を一讀せられた田口先生が、恍惚として、心眼を開く思をせられたであらう、光景は、今私の眼前に彷彿たるのである。

其のギゾーの文明史は、名は文明史であるけれども、其實は一篇の啓蒙的政治史論であるのである。成程第一章に於いては文明、文明史について論じてゐる。然し第二章以下は、全くの政治史論で始終してゐるのである。私に暇が與へられるなら、私は、ギゾーから若干の引照をして彼の文明史なるものは如何なるものであるかを讀者に語りたのであるが、今は其れを斷念せねばならぬ。

(十五)

ギゾーは私が田口先生について云つたとほり、否、其れよりも更らに強い意味に於いて、決して文明史家ではなかつた。彼は徹頭徹尾、政治家たり、政治家たり、又た政治學者たるのである。彼の一生の經

歴が最も有力に此を證明する。

彼は後に其妻となつた當時相當に令名を走せて居た一老女史の助手として、其經歷を始め、二十五歳にして四十歳の其老女史と結婚して間もなく、巴里大學の助教として近世史を擔任し、ついで政府の要路に立ち、屢々國務大臣たり、又駐英公使となり、或時は外務大臣として事實總理大臣の事を行ひ、政治上に失脚する毎に、巴里大學に立戻つて雄大な辯を以て數百の學生を引つけ、最後の失脚後も猶著述を廢せず、瞑目の日に至るまで、年として彼の筆の産物の現はれざることなきほどの精力絶倫な人であつた。然し教授著述は畢竟彼れにあつては餘技のみ、彼の志は政治の實際其のものにあつたことは疑ふ可くもない。彼はマルクス追放を斷行した人として、今日までマルキシストの恨を買つてゐる。其は決してオボルチュニステックに爲したことでなく彼の本心から出た處置であつた。

彼は初め自由主義者であつたが、而も其間に於いても、確信を以てのロヤリストであつた。而して後には自由主義を全く捨てた。然し乍ら、他面に於いて彼はフランスに於いては、——英國は別——プロレタリアの勃興と階級闘争の事實とを、最も早く看破し、之を公言した人として知られてゐる。マルクスが社會主義、共產主義について未だ何事も知らなかつた頃、彼は既に社會主義、共產主義の將來の一大勢力たる可きことを斷乎として公言してゐたのである。人あり、此事を以て彼を不穩思想を抱くものとして難じた。彼は言下に答へて曰く、私は何等の思想をも述べたのではない、私は歴史家として有る事實を唯だ有りの儘に述べたに過ぎないと。彼はナポレオン第一世が不穩思想の巢窟なりとして廢

した佛國學士院の政治道德部——法、政、經、文、社會科學部——を斷乎として再興せしたのである。爾來此部は獨立した一の學士院となつて今日まで存在してゐるので、大學からは今日と雖も全く排斥せられてゐる社會主義的研究は、此學士院あるによつて公然濶歩し得てゐたのである。ブルドーンの『所有權とは何ぞや』がベザンソンの學士院で懸賞論文に當選したものであることは周知の事實であるが、其が可能であつたのは遠くギゾーの右斷行に其源を發するのである。

然し、ギゾーは階級闘争の事實を熟知しプロレタリア階級の勃興す可きことを十分に認めたと爲めに、己れは其全力をあげて此大勢に反抗するを以て其任とした。彼は屢々公言して、自分は第三等族を以て社會の中堅とすることに一生を捧げると云つて居る。

此點に於て、我田口先生とギゾーとは全く無關係である。田口先生の讀まれたギゾーの文明史には未だ此事は少しも顯はれてゐない。文明史時代に於けるギゾーは單なる政治史家であつたのである。一言もプロレタリアの事に及ばず況んや階級闘争の事に及んでは居ないのである。其ギゾーこそ、我田口先生が就て學ばれたギゾーであるのである。

(十六)

語が大分横道に外れたようであるから、先を急ぐことにする。

田口先生が政治史を以て文明史とせられた外形上の一の因縁は、ギゾーの文明史に——斯く云ふは

或は語弊はあるかと思ふが——誤られた爲めであらうと思ふ。先生はギゾーによつて少くとも西洋に於ける文明史とは畢竟政治を以て社會變遷の理法を左右する最後のエージェントとするものなりと認められたのではあるまいか。

尤も先生は云つて居られる。『若し開化史と稱すべきものは、バツクル、ギゾー數氏の外に之を著せし者なきを以て、世に文明史體と稱すべきは、此事實の他にあるなしと云は、余輩は其の言の妄なることを斷言せざるべからず、苟も史理を明晰せし體あらば、即ち開化史體たるべきなり』(鼎軒田口先生傳二九三頁)『開化史は則ち然らず、何故に斯の如き現象ありやと理由を記する也、抑々社會の現象は、凡て偶然に發するものにあらず、故に一美術の消長盛衰の理由をも精密に説明せんと欲せば、當時の政治上社會上其の他外圍の有様を調査せざるべからず、然れども若し夫れ政治上社會上の大勢を誤りなく記載せば、當時に行はれたる美術の盛衰は大約想像するを得べし。特に美術のみにあらず、其の他の學術技藝器物衣服等の盛衰大約想像するを得べし。故に開化史は一々之を細記するを要せざるなり』(同書三四〇頁)

先生の此言中には不精確なるものがある。ギゾーとバツクルとを同列にあげて、其れ斗りを文明史と思ふは誤りなり云々と云はれること之れである。

ギゾーは寧ろ、先生の主張せられる通り、苟も史理を明晰せし體あるものとして開化史體——即ち私の言を以てすれば啓蒙的政治史體——を取つたもので、其反對に、一々之を細記するを要せずと先生の云はれることを「*Sittengeschichte* 風」に——細記したるものは、バツクルであるのである。即ち却つて此一言に徴しても、先生が、バツクル體を斥けて、ギゾー體を以て文明史なりとせらるゝことが窺ひ知り得られるのである。『然れども若し政治上社會上の大勢を誤りなく記載せば、當時に行はれたる美術の盛衰は大約想像するを得可し』云々とは、實にギゾーの執るところの見解であるのである。即ち私がかくとも外形的には先生の文明史——政治最終原因史觀は、ギゾーの影響によるものではないかと推測する所以である。

(十七)

此の外形的理由よりも遙かに重要なのは、第二の在內的原因であらう。

在內的とは少し可笑しい語であるが、私の意味は先生の根本イデオロギーが政治史的であつて、毫も文明史的でなかつたと云ふこと之れである。而して其れは實に、舊事一切打破的なる間に於ける明治維新のイデオロギー其ものであつたのではあるまいか。

先生は舊幕臣として而して江戸ッ子として、明治維新を眺められた。舊幕臣、江戸ッ子は明治維新の敗殘者である、被壓迫者である。其敗殘者被壓迫者たりしは主として政治的意味に於いてある。經濟的意味に於てではなかつた。政治的被壓迫者が發言を許されるとき、先づ第一に發する聲は政治上の解放を求むる聲其れであるは毫も怪しむに足りない。恰かも巴里や倫敦やコンスタンチノーブル

に今流寓しつゝある白露人等の其れの如くに。

炯眼なる先生は決して政治以外の事に觀察が及ばなかつたのではない。否、三上博士が『才氣縱横趣味の多方面』と云はれ、黑板博士が『文學の才ありて種々の方面に卓見の觀らるべき』と云はれたとほり、實に江戸時代に於ける白石に毫も劣らなかつたに相違ない。乍併、原因結果の理法に基いて百般の社會相を尋究、考察して結局先生の到達せられた結論は、政治の力其れであつたのではあるまいか。而して其政治的の力とは政治的勝利者の其の敗北者に對する壓迫之れであると看られたのではあるまいか。

此點に於いては、舊幕の祿を一寸食んだからとて、明治政府に仕へずと意氣を立て通した九州武士の福澤先生は、我田口先生とは著しく趣を異にしてゐるかと思ふ。福澤先生は成程田口先生と同じく、明治維新による政治的敗北者の群に屬して居られたには相違ない。併し親代々の舊幕臣たり、殊に江戸ツ子たりし田口先生——尤も先生も僅の間大藏省に出仕せられたことがある——と、元來が中津藩士で、ホンの僅の間徳川氏の祿を食んだと云ふ關係あるに過ぎない福澤先生とは、其のイデオロギイに於て、自ら著しき相違なきを得まいと思はれる。

少くとも、福澤先生は一切の原因を政治に歸せなかつた。無論政治的勝利者に楯突くことは飽迄突かれ、榎木氏等を瘦我慢の説や丁丑公論で小氣味よくやつつけられはした。又政治上の自由放任を勇敢に主張せられること、我田口先生と双壁であつた。然し養子の制を舊弊なりと痛論せられつゝ、自家

には養子を迎へられるほど——故濱野定四郎氏の演説に據る——變通自在な福澤先生は、三田社中の出身者が、政府庇護の下に立つ資本主義のチャムピオンたることを決して斥けられはしなかつた。徹底一貫と云ふ點から云へば、田口先生は福澤先生の企て及ばざる氣概を立て貫かれたのである。其の他方に於いて其イデオロギイの公平と云はうか、該博と云はうか、其の點に於いては、田口先生は福澤先生に及ばざるものがあつたと云ひ得るかと思ふ。而して此點に於いて、田口先生は實によくギゾーに似通へりと云はねばならぬと思ふ。

今日の史家はギゾーの天才學者たることを十二分に認めつゝ、彼を以てAutodidactたりしこと、融通の利かぬ頑固者なりしことを殆んど異句同音に唱へてゐるのである。田口先生は、たしかに強情者であり、又た或點に於いては、一國者であり、他人の言説を容れる能力は餘り多量に有つて居られなかつた。——但し先生は反對論や批評を飽迄好まれた。

故植村正久氏は稀有の人物批評家であつたが、福澤先生を以て臆病なる由井正雪なりと評し、田口先生を以て馬車馬なりと評せられたことがあるソウである。臆病なる由井正雪云々は如何あらうかと思ふが、馬車馬論は實によく當つて居るかと思ふ。

私は直接には晩年の田口先生を知るのみであるが、文章の上では實に私が十三四歳の時から高商で休職を命ぜられた三十歳の時まで、先生の筆になるもの、殆んど其一も之を見落さなかつたものであるが、先生は好んで反對論を歓迎せられる。名も無き投書家の議論にも一々相手となつて居られた。然

し私は思つた、田口先生と議論を交へる位つまらないことはない、何となれば、先生は決して参つたと云はれる人ではないと。瀧本博士、豊原又男氏などの反對論は中々有力なものであり、又た『信用は貨幣を節約せず』に對する佐野博士其他の論難は、たしかに手答へのあるものであつたが、先生は其當初の議論の一點一劃をも捨てられることはなかつたように記憶してゐる。

私は屢々人と論戰を交へる。其中でも、河上博士は最も恐しい論敵であつた。しかし、博士は一應は必ず應戰せられる。而して後になると全く立場を代へて曩きの私の論難を快く容れられることがある。其最も著しい例はマルクスの翻譯の底本に關する私の非難に對し、博士は長々と論辯せられたが、事實に於いては私の主張を其儘に容れて全部私の云つた原本によつて改譯するの勞を惜まれなかつた。私は、斯くの如きは我田口先生には到底望み得ないことではあるまいかと想像するものである。

(十八)

兎に角、先生は同じく文明開化論者であり乍ら、福澤先生とは事異つて始終一貫、政治的被壓迫者のイデオロギーを頑守せられた。而して、一切の事を其のイデオロギーを以て觀察し、解釋し、言論せられたものと思ふ。

斯の如きイデオロギーは、先生の時代に於ける——否、今日に於ても——我日本のブルジョアイデオロギーでは、決してなかつたものと私は思はざるを得ぬ。此れ即ち先生が取引所肝煎を永く續けられ、先生が何等政府の庇護を受けず純民業として自ら設立せられた其の愛兒たる兩毛鐵道會社の株主等から、云はゞ體のよい追出しを喰はされた一原因ではなかつたらうかと思ふ。何となれば、先生は、到底現代の日本の資本家階級に容れらる可きイデオロギーを持合せて居られなかつたから。

否、東京經濟雜誌が澁澤子爵の斡旋で擇善會と云ふ資本家團體から月百圓とかの補助金を受けることを條件として創立せられたものであるに拘らず、創立後間もなく先生は其補助金を辭退し、擇善會は解散し、爾後先生は全くの獨力で千百の苦難と戦ひつゝ、右誌を繼續せられたのも、又た此れから生じたことではあるまいか。先生は政治に志を絶たず永く府會、衆議院に出られたけれども、選舉の度毎に有権者の許へ御辭儀をして歩くことを何よりの苦痛として居られたことは、鹽島君から度々承つた話であるが、其れは先生がブルジョアのイデオロギーを持つて居られなかつた——江戸ッ子たりしからでも無論あらうが——爲めではあるまいか。此點に於いても、先生と福澤先生とは大分趣きを異にしてゐる點がありはしまいか。

然しこんな餘談めいたことを書き列ねて居ては、際限がないから、此邊で止めて置くとして、私は今他の方面からモ少し此事を考へて見よう。

先生は其文明史に於いてギョーに誤られた如くに、其經濟學に於いて英國正統學派の學說に誤られたものではあるまいか。先生は立論の直截にして事理の明晰なるを何よりも尙ばれたようである。文明史については、明かに其事を明言せられてゐることは、前に引いた一句に徴して知り得るが、經濟學

に於いても、亦左様であつたのではあるまいか。其れは商業史歌を思付かれた動機として、ロツシアの商工經濟論の書を痛く難ぜられた言によつて窺ひ知るを得ると思ふ。尤もロツシアのだらゝ、經濟論は、我々でもウンザリするところであるが、田口先生は其商工經濟論を——恐らくは、無類の惡譯と云つて然る可き平田東助氏(?)の邦譯によつてであらうと想像する——一見せられて、髮冠を衝かん計りに憤られたように考へられる。

此先生に、最もよく訴へ得る經濟學は、正統派の經濟學の外にはなかる可き筈である。尤も當時其れ以外のものは、我邦には餘り傳はらなかつたから、先生が當然先づ英國正統派の經濟學を學ばれたのに、何も大した不思議はないことであるが、然し犬養毅氏のケリー翻譯に對しては可なりひどいことを言つて居られる。明治二十年四月の東京經濟雜誌に掲げた朝野新聞を讀むと云ふ一文(本卷五七頁)に於いて『議論に於ては米國の保護稅家ケリー氏を祖述し、文章に於いては唐宋の大家を尊崇せる人なり。有形上より觀察するも、無形上より推測するも、日本の分子よりは多く外國の分子を含有する人なり。然るに此記者にして、却つて歐米の事物を敬重するを責むるは實に大奇ならずや』と朝野記者を難じて居られる。其記者とは犬養毅氏のことであるか否か私は知らないが、ケリーの保護稅論を祖述することを以て外國崇拜の一例として罵倒せられるところ稚氣充溢誠に興味があるが、これは平生ケリーの保護主義を蛇蝎視して居られた爲め、不知不識此言が發せられたものではあるまいか。

兎に角、經濟學の學說中、先生向きに出來上つて居ること、英國自由放任主義の正統學派の如きものは、他に之を見出すこと能はざりしは殆んど疑を容れないと思ふ。何となれば、此學說はマルキシズムの唯物史觀說と、其の直截簡明なる點に於いて經濟學說中の双璧であり、而して、當時マルクス說は之を學ぶ可き便は我邦に於ては全く缺けて居たから。

(十九)

私は詰らぬ想像を廻らして見た。先生にして、其生るゝ二十年を晩くせられたならば、現代の日本隨一のマルキシストは河上博士たるよりも、むしろ或は我田口先生であつたのではあるまいかと。河上博士は必ずしも直截簡明を愛せられず、迂餘曲折を特に好まれることも尠くないようである。だから、堺枯川氏の如きは屢々博士を評して『抜け難き人道病患者』などと戲言せられるし、福本和夫氏の如きもツヒ近い頃まで同じような事を博士に對して言つて居られた。殊に始終一貫などと云ふ事は、博士には到底望まれない。讀賣新聞上の千山萬嶽樓主人が、我河上博士であつたとは、今日の青年諸君は殆んど之を信じ得ないであらう。否『貧乏物語』が、河上博士の一大名著であつたとは『社會問題研究』の讀者の容易に首肯し得ないところであらうと思はれる。

此點に於いては我田口先生は全く異なる。先生がマルキシズムに來ること全くなしとせば則ち已む。一度其處まで來られることがあるとしたら、ソレコソ、世にも恐ろしい徹底的マルキシストとなられたであらうと思はれる。何となれば、直截簡明、始終一貫の點に於いては唯物史觀は、レセフェア說の到

底企て及ばざる所であるから。

田口先生は其直入觀の點に於いて英國自由主義に全く歸服せられた。併し其然る所以は其れがブルヂオアの哲學たるが故と速斷してはならぬ。幸か不幸か此の單刀直入經濟學たる自由放任經濟學は西洋に於いてはブルヂオアのイデオロギーであつた。ソコで森戸君の云はれる通り先生はブルヂオアイデオログの外觀を取られた。然しそれは單なる外觀である、單なる偶會であつた。先生は決してブルヂオアイデオログであつたのではない。否、決してあり得なかつたのである。是れが私の想像するところである。果して當れりや否や、讀者の判斷に一任する。

(二十)

私は今項を分けて田口先生の社會論に言及する暇を持たぬものであるから、序として先生の社會政策論の中から、右述べたことの旁證ともならうかと思ふ一二節を茲に引いて置く。

先生は『同盟罷工の可否果して如何』の問を發して、之に答へて云ふ。『試みに雇主に就いて之を問へば、一も二もなく之を排斥し、蛇蝎の如くに疾視せざるもの殆んど稀なり。職工に問へば則ち曰く、雇主の無狀彼が如し、同盟罷工の起る實に己むを得んやと、去りて學者に問へば諸説紛々たりと雖も、要するに之を排斥せざるものは亦た殆んど稀なり。然りと雖も余輩を以つて之を見れば、同盟罷工其の事は決して惡事にあらざるのみならず、巧みに之を行へば社會の爲めに利益少からざるべしと信ず』(本卷

五三六頁)。而して其論の終りに於て更に云ふ『然りと雖も同盟罷工を企つべき時と企つべからざる時とを判別して、之に投ずるは容易の業にあらず。然るに勞働者の如きは各國共に目に一丁字も知らざるもの多くして、之を判別するの智識なく、常に漫然として同盟罷工を起せり。是れ其の失敗多き所以にして、畢竟世人をして彼が如く同盟罷工を排斥するに至らしめたるものも、其の失敗の結果に就いて速斷せるのみ、慨くに堪ゆべけんや。是に於て、余輩は世の内外の形勢及び商況の變遷等を洞見するの明あり、而して無事に苦しめる無数の學士に向ひて希望せざるべからざるものあり。曰く諸氏の率先して身を勞働社會に投じ、之に同盟罷工を起すべき時機を教へ且つ之を指揮せんこと是れなり。蓋し斯くの如くする時は、我が邦方今の大問題たる貧民救濟の爲めに裨益少からざるべきなり』(本卷五三七頁と。

先生を以て、レセ、フェーア一點張の自由貿易論者たるのみと信じてゐる人々は、此言を聞いて定めし奇異の感を催すであらう。勞働組合に、勞働者以外のもの、加入を認めずとせよとは、今日でも未だ商業會議所あたりに群つて居るブルヂオアの極力主張するところではないか。然るに田口先生は明治廿五年八月に於て、既に鈴木文治君や麻生久君などのような人の蹶起せんことを希望せられて居るのである。否、少し言ひ過ぎかも知れぬが、先生はプロレツトカルトの必要を或意味に於いてテーゼとして居られるではないか。

先生は又たあらゆる機會に於て、勞働立法に反對し、勞資の關係は全然兩當事者に一任す可きを主張

せられたが、同時に勞銀の必ず騰貴す可きものなること、勞銀騰貴のあらゆる機會に於て勉む可きものなるを主張し、其爲めに同盟罷工を右の如く是認せられてゐるのである。其反對に法律を以てする勞働時間の制限に極力反對し、豊原又男氏が私の譯著『勞働經濟論』の主張に左袒して、勞働時間の短縮は却つて能率を高むるの理を論ぜられたるに對し、世また此の如きの理或は之れあるべし、然らば、雇主は時間短縮を利として、早晚之を實行するに相違なし、政府が法律を以て、其欲せざるに、時間を制限するは斷じて不可なりとせられた。

此等の論と雖も、先生はマカロツクあたりの英國派の説からヒントを得られたに相違ないであらうけれども、同時に又た其れは先生を以てブルジョアイデオログとするの當らざるの一證と見る事が出來ようと思ふ。

先生の極力自由放任を主張せられたるは、一は英國自由放任派の爲めに誤まられたるものたる可く、又た直截簡明を喜ぶ先生の天性これを然らしめたのであらうと共に、政治上の平民的解放を以て何よりも第一とする先生の根本信條與つて力あることを否定することは出來ない。

ギゾーにあつては第三等族であつたもの、先生にあつては平民であつた。先生の平民とは其範圍の極めて廣いものである。

先生は『日本開化の性質』に次の様に云つて居られる。『余の見る所を以てするに、國の開化に二種の區別あり、一は貴族の導ける開化、一は平民の導ける開化是なり』『余歐米諸國今日の事情を査察するに、國々に於て、多少貴族的の分子を含むものなきにあらずと雖も、其の大本は即ち平民的の性質を存することを見る也』『之を要するに、我國有形無形の開化をして彼の貴族的の臭氣を脱せしめ、以て其所得を増進し、其智識を發達し、其人種を改良するにあらざるよりは、逆も歐米今日の進歩に當る可からざるなり』(本卷一八頁及一三七頁)と。これが先生の平民文明、平民開化の主張の基くところである。私は此を平民的啓蒙的政治哲學と呼んで大過なきものと思ふ。先生の平民主義は一種の啓蒙哲學觀であつた。森戸君が向上的と名くるもの、私はむしろ其を啓蒙的と見るものである。而して先生は此啓蒙の大事業の最終、最有力のエージェントを平民政治の意に解した政治にありとせられたのである。

啓蒙主義は明治維新の先導者に一般共通の哲學であつたことは諄々しく言ふを俟たぬ。福澤先生も啓蒙主義者であつた。伊藤博文公も啓蒙主義者であつた。大隈重信侯も啓蒙主義者であつた。唯、田口先生に於いては、其啓蒙主義は政治的敗殘者、被壓迫者の色を著しく帯びたものであつたと、私は考へるのである。兎も角其れは向上的にせよ、向下的にせよ、如何なる意味にてもブルジョアのイデオロギイではあり得なかつたと思ふ。

(二十一)

以上私は不思議期以上の紙數を費やし終つた。顧るに、本文の始めに斷つて置いた如く極めて限定した一小考察としても、未だノ言洩らした所が甚だ多くあるようである。殊に明治初年の文明

開化主義の眞面目を描出するに於いて盡さざるところ甚だ多いことを悟るものである。然し幸なことには此書と時を同うして吉野博士の『明治文化全集』が刊行せられることになつてゐる。博士は近年其主力を明治文化の研究に傾倒して居らる。従つて私が論ず可くして論じ及ばざりし、否論ず可く私の力及ばざりし諸々の事柄については我々は吉野博士の研究に參することによつて十二分に之を學び得ることと思ふ。

唯私に取つての主題目たる田口先生の文明史觀については、以上を以て極めて粗笨ながら私は私の言はんと欲するところを述べ了つた。無論未だ考究すべきことは澤山に残されてゐるし殊に一々の細目に涉つては、私は何事も記さなかつたのである。他日時と力との與へられることあらば、私は或は更らに此等について、補稿したいと望んでゐる。偉大崇高なる先生の學業、文章を記録するに斯くの如き貧弱杜撰なる一斷片を以てした罪は、在天の先生の靈に對し深く謝せざるべからざるところである。

昭和二年六月二十三日午後七時半

中野本郷三素書屋に於て

參考引用書

(一) 校正標註折焚く柴の記

和裝 三冊

標註並校正者 内藤 聡 叟

明治十四年第一版 同廿三年標註校正第二版 東京書林 青山堂 發兌

(二) 讀史餘論

和裝 六冊

校正者 萩原 裕

萬延庚申仲冬刻成 明治九年四月一日版權免許 甲府溫故堂内藤藏版 發兌

(三) 新井白石全集

第三 洋裝 一冊

第三頁以下 折たく柴の記

第三九九頁以下 讀史餘論 卷一・二・三

編輯校訂者 今泉 定 介

明治三十九年一月 國書刊行會 刊行

(四) 廿二史劄記

和裝 十八冊

陽湖 趙 翼 撰

校訂者 貫名 芭

覆校者 池内 奉 時

校字者 貫名 祁 貫名 均

文久二年二月新刻 謙謙舎藏版

(五) Henry Thomas Buckle,

Introduction to the History of Civilisation in England. (1857—61)

New and revised Edition with Annotations and an Introduction. by John M. Robertson. London (Routledge & Sons) without date.

十一 文明史家としての田口鼎軒先生

追記。本篇起稿後私は故幸徳秋水氏舊藏本『大遼文庫』(在印)の此書を手に入れることが出来た。其れは米國版の三冊本であつて、監獄差入票が貼付してある。秋水氏は其最後の日に於いて猶ほ此書を愛讀せられつゝあつたものと見える。

(七) François Pierre Guillaume Guizot,

Histoire de la civilisation en Europe depuis la chute de l'empire romain jusqu'à la révolution française. Paris 1828. — 1^{re}me édition 1833. — 28me édition Paris (Cours d'histoire moderne) Perrin et cie. sans date.

Allgemeine Geschichte der europaischen Civilisation. Nach der 5. Aufl. frei übertragen von Dr. Carl Sachs. Stuttgart 1844.

History of Civilisation in Europe from the Fall of the Roman Empire to the French Revolution tr. by Talboys. Oxford 1837. tr. by Hazlett. New York 1872.

十一 附録 田口全集の刊行に際して

ある英吉利の學者の言つた言葉に、自分はアダム・スミスに就ては少しく、マルサスに就てはより多く、リカードに就いては最もよく知つてゐるが、自分の一生の間に遭遇つた人々の中で此等の三人が恐らく最善人であつたと云ひ得ると思ふと云ふのがある。此は英吉利の經濟學を人の方面から最もよく云ひ表はした言葉であり、最も當を得た批評である。蓋し英吉利の經濟學の設立者たる彼等三人は人格者として最も秀でた人々であつた。彼等以後英吉利には一種の傳統とも云はるべきものが存在してゐて、今日に至るも依然として亡びないのである。即ち經濟學に従事すべき人は一流の人物であるべきであり、又一流の人物が従事しない限り、經濟學は成就するものではないと云ふ傳統が出来あがつてゐるのである。英吉利の經濟學が甫めて吾國に移植せられた當時と今日とを比較するときは、洵に隔世の感ありとも云はるべきで、一部の皮肉な論者が云ふやうに、今日經濟學に従事する者は恐くは世の中の人間中の糟であると云ふ感じをさへ起すことなきにしもあらずである。

我國明治の初期に於ては政治、經濟に従事する人は第一流の人であつたらう、單に學才に於てのみならず其の人格に於て第一流であつたやうに考へられるのである。私共の見る所に據れば、西洋の經濟學を日本に移植する上に與つて功績あつた人々の中、明治以前にあつては神田孝平氏明治時代に入つ

てからは小幡篤二郎氏、林董氏、犬養毅氏等の名を挙げ得るが、併し此等の人は何れかと云へば本流ではなかつた、本流として西洋の經濟學を日本に移入するに功勞あつた人々としては第一に福澤諭吉氏次で田口卯吉氏、更に天野爲之氏の三氏を擧ぐべきであると思ふ。福澤、田口、天野の三氏は西洋の經濟學、殊に英米の經濟學を日本に移植する上に忘るべからざる功勞を立てた人である。元より其の間獨逸の經濟學を移入する上に功績ある人もあるが、公平に言つて右の三氏の功績に比較すべき人は其以後に於てなかつたと斷言し得る。福澤氏は無論學者ではなく、さりとて政治家と云ふのでもなかつた、先づ云はゞ大教育家と云ふべき人であつて、西洋流の經濟學の考へを以て數多の英俊を導き之を育て上げた、そして其の薫董を受けた人々が後來の日本の社會に盡した功績は洵に大きいものがある。此の點に於て彼は偉大な教育家であつた。併しながら學者としては其れ以上には出で得なかつたのである。此と反對に天野氏は經濟學の興行を深くし、其の幅を廣くし、學者として經濟學を教へ普及した點に於てその功績は實に偉大であつた。たゞ悲しむべきことには天野氏には有數の門下はあつたけれども、學問上に於て出藍の譽を恣にし得たと云ふ人に至つては極めて僅少であり、否殆んどないと云つて宜い位である。従つて天野氏の經濟學、天野氏の學說といふものは同氏一代に於て其の姿を亡つたものと云ひ得る。無論同氏の遺業たる東洋經濟新報は今日尙ほ一流の經濟雜誌として重きをなし其の所説亦社會を利導しつゝ、ある點に於て天野氏の形跡全く絶えたりとは云へない、しかし思想上に於いて天野氏當時の東洋經濟新報と今日の其れとは少なからぬ距離を有する。従つて同誌の存在が學問上に齎らす寄與は大なりとするも、天野氏の形影は已に没したりと云ふも、必ずしも過言ならざると思ふものである。此の兩者の中間に立つものが我が田口先生である。氏は無論直接學校の教壇に立つて經濟學を教へた人ではなかつたけれども、其の著書を通じて日本の社會に經濟學の知識を啓發し普及した功勞に至つては實に不朽である。先生の創始せられ先生自ら主宰された東京經濟雜誌は先生の存生中には最上の經濟學教科書であつたと云ひ得やう。斯の如く一面學者として盡すところ大であつたのみならず、他面福澤氏と同じく日本の實業界に其の蘊蓄を傾けて自己の經綸抱負を行はしめ、又自ら行はれたのである。此等福澤、田口、天野の三氏はアダムスミス、マルサス、リカードの三人に就て云はれたと同様に、當時に於て見出し得る最上の人格者であつた。日本の經濟學が此等三人の偉大なる人物を有し得たことは永久に抹消し去られない愉快なる第一頁をなすものである。三氏とも經濟學說に於ては同一轍であつて、英吉利の自由主義經濟學、所謂正統派の經濟學說を保持してゐたのであるが、福澤氏は其の學說を終始一貫し得なかつたに反し、田口、天野兩氏は驚くべき徹底さをもつて其の基本學說を凡ゆる方面に力説して終生更へなかつた。元より兩氏とも晩年に於て多少變つたと推せられる點なきにしもあらず、然れども全般的に云つて兩氏とも其の出發點に於て英吉利の經濟學說を飽くまでも更ふる所なかつたと云ひ得る。此れは學問の進歩といふ上から云へば、無論議論を入れる餘地があり得る、されど當時に於ける先達、今日の學者のやうに殆んど毎年其の所說を變へるといふことであつたなれば、日本に經濟學を根深く植ゑ付けることなどは到底夢想だもし得るものでない。

此の意味に於て、兩氏とも其の信ずる所を力説して已まなかつたことは、日本の經濟學にとつても經濟社會にとつても最も幸であつたと云はねばならぬ。そして福澤、田口、天野の三氏ともに人格者として八面玲瓏の人で、如何なる忌憚なき批評家と雖も、此等三氏の人格には一指をも觸れ得ない。例へば天野氏には偏狹の嫌なきにしもあらず、乍去、其れだけ氏の人格は生粹であつた。田口氏には偏狹と云ふ節は毫もなかつた、場合によつては時勢と共に推移すると云ふ時もあつたが、其の人格は恒に燦として日の如く輝き其の間一片の塵だに溜めなかつた。彼の南島商會の事件の如きは田口氏の上に幾百の疑懼と幾千の誹謗を投げ與へた、しかも氏の人格は此の事件に因つて愈々冴えた。如何なる惡意的批評家も其の巧拙に就いては兎も角、其の人格の上に侮蔑的批評を爲し得なかつたのである。尾崎、犬養兩氏の如きも田口氏と同じく清節の士であつた、しかも其の清節を以てこれを田口氏に比較するとき、實に月をもつて日に對するの感を起さしめる。尾崎、犬養兩氏の清節は造られたものであり、田口氏の其れは天來であつた、自ら清節を持つることに氣付かざる裡にも自ら氏には清節が保たれた。此度全集第八卷に收めらるゝ、管の『南洋に去るに及んで意中を表す』の一文を東京經濟雜誌上に讀んだとき私は聲を放つて泣き出さざるを得なかつた。其の文たるや平々淡淡々、無味乾燥なるものではあるが、當時の事情を知る私共には尙孔明の出師の表を讀むの感あらしめた。極端に云ふことが許されるならば、田口氏は一切の著述が湮滅するも、此の一文さへ残れば、氏の存在は永久に亙つて亡びないものであることを信ずる。筆を採つて高潔の字句を竝べ、其のよつて成れる文が稀に見る名文であること必

ずしも難くはない。さりながら田口氏の其れは文ではなく、實に其一言一句盡く氏の肺腑を衝いて出る血であり、その文は洵に氏の行動によつて克明に註釋せられてゐるのである。若し好む所に従つて云へば、私は敢て云ふ、人としての高潔さに於て福澤氏も田口氏には遙かに逮ばないと。福澤氏には田口氏の南島商會に於けるが如き事件はなかつた、嘗て田口氏の如き逆境に立たなかつた、彼は寧ろ甚だ恵まれた人であつた。田口氏は實に逆境に置かれ勝ちであつた。天野氏は早稻田事件と云ふ同氏にとつては憤懣に堪へない苦い經驗を嘗めさせられた、しかも氏は終に黙して語らなかつた。我々は氏の心境を想ふ毎に同情の念禁じ難いものがある。ところが我が田口氏は斯くの如き難境に立たれても天空爽快、其意中を洽ねく天下に表明して、單身小船を驅つて南洋に赴き其の期せるところを果して歸來した。驚くべきは此の匆々たる裡にも尙ほ氏が胸中綽々たる餘裕を残し、南洋のドコかの島の黒ン坊の女王が夜中密かに田口氏の寢室に闖入した一事を極めて興深く述べ送つて居られることであり、我々其の一文を讀んで或は氏の心事を察して感慨之れを久うし、或はその事の突飛なるに哄笑したことであつた。そして此の一事に於て、恒に悠々として迫らない大きな心の持主である氏を見出したことは、我々にとつて如何に大なる福音でありしぞ。單に論説のみならず、些細なる好事に至るまで氏は全人格を以て當時の青年を指導された、其の青年の指導者として、社會の木鐸として當時の日本に及ぼせる影響の甚大であつたことは到底今日の青年の想像を許さないものがある。又田口氏には、『樂天録』の如き戯作めいたものあり、胸中勃勃たる不平を其の中に自ら謠ひ且つ慰められたものである、私共

は元より其の藝術的價値に就いて知るを得ないが、當時の社會の大先達の此の作品は明治の大なる收穫と云はるべきである。或は經濟學の研究を弘めるに當つては「誰れか云ふ經濟學は蠟を嚼むが如し」と其の甘きこと飴の如し」と説いて初學者に發奮の糧を與へたる如き要するに田口氏の經濟學は眼から入つて口に出る經濟學ではなく、盡く田口氏の胸中に入つて咀嚼せられ、血となり肉となつて出て來たものである。田口氏存生の當時と今日とを較ぶるときは寔に比較にならぬほど多くの經濟學的著作が世に出て居る。其の今日にあつて田口氏の論說の決して亡び去らない所以のものは、一に其れが田口氏の血であり肉であることに他ならない。田口氏が其の學說を血とし肉とせるは、單に書齋に於てのみならず、其の實業界に於て、政治界に於て實際の事柄に執掌し、談じ語る中に血肉化されたものである。田口氏の一生の事業及學問を綜合して批評するは自ら其の人があるであらう。私共は唯だ田口氏の存生せられた明治の經濟學の中に生れ出で育てられた一人としては、他の凡てのものが湮滅し去るも、自らの血とし肉として我々に教へた田口氏一人あれば以て足りると思ふ。その田口氏の著作——經濟、歴史、社會、文藝に渉る全集が此度出來ることは私共にとつては故國の復活と感ぜられる次第である。現代の青年諸君が直接此の田口氏と親しく其の活動に於て接觸し得ないことは遺憾であるが、特殊の研究者にあらざる限り手にし難い田口氏の著書が、此度全集として公けにせられるによつて、日本經濟學のインカーネーションたる田口氏の眞面目に接し得ることは蓋し亦多幸と云ふべきである。福澤氏に就いては已に福澤全集の發行あり、今茲に田口氏の全集刊行さるゝに至る若し夫れ希ひ

得べくんば天野氏の全集を得ば、我々は明治年間我が日本經濟學の生じた最善の三人の業績を座右にし得るわけである。所詮全集流行の中には幾多の弊害の生ぜること巷間已に傳ふるところであるが、其れが田口全集刊行の企圖を促す機縁となりたりとせば、又以て喜ぶべき事と云はざるを得ぬ。

(『我等』昭和二年七月號掲載)